

論文

## 〈育児不安〉と主体化される母親たち

——授乳法のマニュアル化がもたらしたもの——

木 下 純 子

〔抄 録〕

本稿の目的は、「〈育児不安〉とはいかなるものか、いつ頃どのようにして成立したのか」ということを、育児書に記述されている育児方法（授乳法）に着目し、それを読み実践する母親がどのように主体化されていったのか、その主体化のパターンの変遷から考察することである。現代に特有な問題として扱われる〈育児不安〉であるが、明治期以降に発行された育児書 118 冊の言説を辿ると、現代の母親が抱えている育児に対する不安感の源流をみることができる。ここでは、明治期から昭和初期の約 80 年間で言説の特徴から 2 期に分けて、それぞれの時期での母親の主体化のパターンと、育児に対する不安や悩みを考察した。

明治期から大正前期にかけての育児書では、「人乳」から「母乳」という言葉の変遷から、授乳の実践者と責任が「生母」に集中し始め、育児をする「私」という主体が立ち上がった。また、授乳法のマニュアルが登場し、育児書が勧める「正しい授乳法」である「時間決め授乳」を忠実に遂行し、「子どもを死なさない母親」となるように主体化された。

大正後期から昭和初期にかけて、授乳マニュアルは厳格化し、マニュアル通りにやっても子どもがうまく育たないという現実から、マニュアルがマニュアルを否定し始める。その結果、母親は、うまく育たない原因を考え、授乳法を改善し実践評価をするという専門家的態度を身につけ、授乳の評価システムを内的に作動させるように主体化された。「より良い子どもを育てる」ことを目標として、常に反省し悩みながら育児をする母親たちは、子どもの育ちの結果を全て引き受ける責任者となったのである。この再帰的母性が抱える悩みや不安は、現代の〈育児不安〉の根底となるものではないかと考察した。

キーワード：育児不安、育児書、授乳法、主体化、再帰的母性

## 1. はじめに

### 1) 問題意識

「育児不安」「育児困難」といった言葉に代表される現代の育児状況は、子どもの育ちとの関連や、虐待といった親の問題行動の原因として捉えられ、ひいては少子化につながる社会病理的な現象として認識されている。現在では、育児といえば「不安」という言葉が自然に出てくるほど巷間流布されている。「育児不安」という言葉の歴史を遡ってみると、1990年代にマスコミに登場した比較的新しい言葉であることがわかる（品田 2004）。その頃から、雑誌記事のような一般向けの読み物から研究論文に至るまで、「育児不安」を題材に書かれたものが一気に増加し始めた。2012年頃から減少傾向になるまで、一定の期間、保育や教育、医学、公衆衛生などの重要な研究テーマ、あるいはマスコミを賑わす話題としてあり続けた<sup>(1)</sup>。以上のことから、「育児不安」という現象は、極めて現代的なもののように思われる。

では、「育児不安」とは、具体的にどのような状況を指すのだろうか<sup>(2)</sup>。上野らの「育児不安」に関する文献レビューによると、1980年代から「育児不安」という言葉が意識的に使用され、母親の学歴や社会的関係の広さとの関連、夫との関係性などが「育児不安」を抱く要因として言及され始めた。1990年代になると、「育児不安」の内容をより明確化するような、不安因子別の検討が多く研究され始めたが、いずれの論文においても「育児不安」に関する明確な定義はなされていない、と結論づけている（上野ほか 2010）。

いずれにせよ、1990年代には一部の研究者が使う言葉ではなくなり、「育児不安」とはいかなるものかという問いに明確な答えは出ないまま、マスコミの喧伝によって、瞬く間に現代の育児環境の悪化や母子関係の病理現象、果ては少子化の原因を端的に表すものとして機能した。「都市化、核家族化が進行し、子育てを支えた地域共同体や親族によるネットワークが失われ、孤独な子育てに悩む母」<sup>(3)</sup>というような一文は、「なぜ育児に対して不安や困難を感じるのか」という問いに対する一般的な答えとして好んで用いられる。あるいは、「子育てに希望や誇りを見出した社会はどこへ行ったのか、高度経済成長期以降の競争主義、学歴主義で『均質』な価値観が家庭を覆った。仕事最優先の企業社会が父親を家庭から遠ざけた。孤立無援の中で心を病む母と子、社会参加と子育ての間で苦悩する母親」<sup>(4)</sup>というように、「昔はそうではなかった」「昔は良かった」というような、一種の懐古主義的な語りが散見される。古き良き時代であった「昔」がいつ頃なのか、記述されている文脈によって変化するが、少なくとも「昔」の状況と「現代」あるいは「現在」を対比させていることは自明であろう。「現代」の問題を語るとき、「過去」との対比において「現代」が可視化されるということに関しては同意するが、「過去」が明確に提示されていない場合は、「過去」は「良き時代」であって、単に戻るべき地点として設定される<sup>(5)</sup>。ここで一つの疑問が生じる。本当に、「昔」は育児を不

安に思うことなどなかったのであろうか。「育児が不安だ」と感じることに「育児不安」という言葉が付与されたのは現代なのかもしれないが、マスコミが語る「昔」は、何の不安もなく育児が遂行されていたのだろうか。現代の問題として特権化することによって、何か決定的な育児に関わる視点を見過ごしているのではないか。歴史学者 **Alain Corbin** は、「心配しているのは、歴史の知識が失われた社会では真実を見る目も失われてしまうということだ。例えば政治家は自分を歴史上の人物になぞらえたり、歴史の都合のいい部分を引き合いに出したりして行動を正当化する。そうした歴史の道具化を見抜くこともできなくなる。現在を距離を置いて見るためにも歴史の力は欠かせない」と述べた<sup>(6)</sup>。いかにも現代の育児の象徴のように思われる「育児不安」であるが、だからといって現代だけに目を向けるのでは、その本質は見えてこない。人類が発生した頃から連綿と続いてきた「子を育てること」が、どこで何がどのように変化したのかを知ることなしに、現代の育児に何が起きているのかを知ることはできないのである。

「育児不安」が社会問題化した頃、その打開策として行政や育児支援団体が一体となって、「昔」のような対面重視のコミュニティを取り戻そうと、育児サークルや地域の子育て支援活動を積極的に進めた<sup>(7)</sup>。しかし、それで事態は好転したかと言われたら、そうは簡単に「昔」は取り戻せなかった。現代の育児の状況だけに目を奪われ、歴史を道具化した結果の懐古主義的な解決策は、残念ながら育児の状況を好転させることはできなかったと言えよう。今やリアルな対面での繋がりよりも、SNS (Social Networking Service) のみで繋がっている会ったこともない人と、育児の大変さや愚痴を言い合い、私だけが辛いのではないと安心する時代となっている。では、今でも無くならない「育児不安」という現象の正体は何なのであろうか。本研究は、多くの研究がなされているにもかかわらず、漠として捉えどころのない「育児不安」とは、如何なるものか、いつ頃どのように成立したのか、という問いに答える一つの試みである。この問いは、「育児不安」は現代に特有の問題なのか、「昔」は存在しなかったのか、という素朴な疑問から始まった。「育児不安」という現代に特有なものと思われている現象を、「近代日本の歴史的文脈の中に置き直し問い直すこと」(赤川 2006: 9)によって、「育児不安」の本質と源流を明らかにすることを目的とする。

## 2) 「育児不安」とは何かー「育児実践」という視点

本論で取り上げる「育児不安」という現象は、ひとつの社会問題という捉え方の中で、解決に向けて多くの実証的研究がなされている。そのいずれもが、現代の育児を取り巻く家族や社会的ネットワークなどの社会環境の変化、主な養育者である母親の意識の変化や心理的問題に起因するものとしている。しかし、「育児不安」は「近年の社会環境の変化」の影響を受けて派生した現代特有の現象なのだろうか。本論では、「育児不安」という、漠然としたイメージで捉えられ、様々な解釈がなされる現象について、「育児不安」の本質とは何か、あるいはそ

れと「社会」はどのように関連しているのかということを明らかにしたい。そのためには、社会環境の変化が「育児不安」を発生させたという因果関係を証明すればよいのだが、直接的な証明は不可能である。そこで、「社会」と「育児不安」との間を媒介する、育児の当事者である養育者の「育児実践」という具体的な行為に焦点を当てて考察する。「育児実践」とは、具体的には育児法（抱っこ、授乳、おむつの替え方、お風呂など）のことであり、子どもに対する生活の援助やケアという、日常の世話の形態のことである。その日常的な行為は、養育者が子どもに向かい合うときの「構え」が具体化したものであり、その「構え」がどのようなものであるかによって、育児方法が選択される。養育者（主に母親）は、日々の育児法の実践によって子どもを育てながら、自らそれを選択する存在として主体化されていくのではないだろうか。

本論では、数ある育児実践の中でも「授乳法」を取り上げる。「授乳」は、出生した子どもが生きていくための重要な育児法である。なぜならば、哺乳類である人間の乳児は、「乳」を飲むことで生存可能だからである。従って、生まれてきた子どもの生死を左右するものであり、育児法の中でも物理的に多くの労力と時間が割かれる授乳は、子どもに対する養育者の「構え」をよりクリアに捉えることができると考える。

一方で、母親たちによって実践される育児法を背後から支えたのは、近代社会成立以降の「育児書」の存在であった。「育児書」は「育児不安」との関連性において、「マニュアル育児」「育児の人的ネットワークの切断」の原因とされ、育児不安を生成、増幅させた張本人として捉えられることが多い<sup>(8)</sup>。しかし、育児書が提示する育児法は、単に育児スキルの紹介というだけでなく、「子どもをどのようにとらえるのか」というような、育児対象である子どもに対して、どのような「構え」で臨んだらよいのかということ、そこから読み取ろうとする母親の態度を醸成するものと捉えることができる。従って「育児書」のなかの言説は、母親がその内容をどのように読み取り実践しようとしたのか、という主体化の中身を推測する資料になりうる。以上のことから、「育児書」にある育児法（ここでは授乳法）の言説を分析することによって、母親の主体化のパターンの変遷を捉えることができると考える。

近代以降に発行された育児書や育児に関する記事に書かれている育児法の記述から、当時の母親が育児法を実践する際の子どもに対する「構え」を推測することによって、明治期から昭和初期までの、母親の主体化のパターンの変遷を辿る。それぞれの時代の母親が抱く育児への不安はいかなるものだったのか、その不安は現代の「育児不安」とどのように接合するのかを考察したい。

### 3) 育児研究の中の「育児不安」研究

「育児不安」についての論考を進めるにあたって、まず、「育児不安」研究がどのような育児状況から発生してきたのかを確認する。「育児不安」研究は、広い意味での育児研究の一分野と捉えられる。そこで、ここでは育児全般に関する研究も含めて、研究対象や視点の歴史的な

変遷を大局的に捉えてみたい。

「育児」という行為が認識され、人々の意識に上ようになってくると、それを何らかの形で記述するものが登場する。その一つの形態が「育児書」と言える。育児書が提示した「正しい育児」に対して、その通りにやらない、あるいはできないという問題状況の分析や、問題解決の技法の根拠として提示された「育児研究」の流れを簡単に押さえておく。

育児についての専門家における研究は、古くは大正時代に遡る<sup>(9)</sup>。明治維新から約半世紀を経た大正期は、日本が近代国家として発展しようとした時期であった。日清・日露戦争、あるいは第一次世界大戦の経験により、近代国家を担う若い世代の健全育成を目指して、その前段階である妊娠・出産・育児にスポットライトが当てられ始めた。例えば、大正14年に発行された『妊娠より健全なる育児法』の自序には、次のように書かれている。

今や世界の物質文明は日1日と急激に目醒しき発達進歩の状を示し、国と国、人と人とは互いに智識の戦争に全力を傾けている。この秋にあつて国家としても將又社会としても健全にして学識ある国民を作り国家強富の基礎をなすは先ず健全なる小児を得て、然る後十分これを教養し、次の時代の国民となさねばならぬ。我々は、この次の時代の国民たる小児を作らねばならぬ重大なる責務を双肩に荷負っているのである。第二の国民たる小児を作り国家強富の基礎をなす第一要件は、取りもなほさず妊娠と育児であつて……(後略)

このような言い回しは本書だけでなく、この時代の他の育児書にも多く見られるものである。このように、大正期という時代背景は、否が応でも「妊娠」や「育児」を可視化し、国に役立つ健全な人間を育てるという目標に向かって育児を意識的に行う基盤を醸成する契機となった。そのような育児の流れに大きな影響を与えていたのが、当時の育児研究論文集とも言える『育児雑誌』であろう。名称は「雑誌」であるが、内容は医学論文・随筆・体験談・行政統計など、専門的なものから軽い読み物まで網羅している<sup>(10)</sup>。執筆者は、医者、教育学者、児童研究者、文学者などの「育児専門家」と呼ばれる人々であるが、専門家向けに書かれているのではないことが、文体や内容から見て取れる。育児に関する専門的な内容をわかりやすく解説するといった記事が中心となっており、高学歴かつ教養を身につけた一般の母親が読むことを想定されていたと言えよう。この雑誌が発刊されていた大正期から昭和初期は、育児書の第一次出版ブームにもあたるといわれており、量だけでなく質的な転換点となったといわれている<sup>(11)</sup>。では、この頃の育児研究とはどのようなものであったのだろうか。

「育児についての研究」といっても、細かく見ていくと多くの分野に亘っている。中でも、子どもの身体発育、発達や栄養、疾病を中心に扱う小児医学分野、精神発達、心理面を扱う心理学分野、育児を教育との関連で捉える教育学分野の三つは、育児研究の中でも中心的な研究

分野であるといつてよい。その多くは現在でも育児研究の中心的分野として引き継がれている。また、特殊な分野では、非行少年の保護矯正や障害児の教育訓練に関する研究も、この時期に大きく発展した（首藤 2004）。

現在に至るまで、研究対象（子どもや育児）や分野は共通していても、その研究の目的は時代によって大きく変化している。大正期から昭和初期にかけては、西欧近代国家と比較して乳児死亡率が非常に高率であったことから、次世代を担う子どもの死亡率が高いのは国家存亡の危機であるとして、改善策を視野に入れた研究が多く行われた。第二次世界大戦前後には、衛生状態や子どもの栄養を改善するために、そして戦後の混乱期が過ぎる頃になると、乳幼児死亡率の動向や心身の成長発達のような医学的現象に対してだけでなく、家族・親子関係や母親・子どもの心理などの心理学的研究が多く行われるようになった。これらは、戦後本格的に日本に導入されたウィニコットらの児童心理学の影響が大きかったと言えよう<sup>(12)</sup>。物質的な環境が整備され、衛生や栄養状態に特別な配慮を必要としなくなった高度経済成長期以降、育児の問題点として新たに登場したのは、子捨て・子殺し、育児ノイローゼといった母親の異常行動や、親の子どもへの過干渉・極度の甘やかしによって起こるとされる子どもの病気（母原病）についてであった。そのような社会環境の中で「育児不安」に関する研究が始まる。

育児に関する各分野の研究の中で「育児不安」という言葉が初めて登場するのは、1976年に雑誌『児童研究』に発表された『母性の精神衛生に関する研究－育児不安を中心にして－』という論文である<sup>(13)</sup>。当時、一般向けの育児に関する書物の中に「育児に対する悩みや不安」という表現はあったにしても「育児」と「不安」を合わせて「育児不安」と記述し、一つの単語としてある特定の意味を持たせることはほとんどなかったといつてよいだろう。少なくとも専門家というごく限られた空間の中では、そのような育児状況が新たに認識され始めていたと推測される。しかし、現代では専門家でなくとも誰でも「育児不安」という言葉があることを知っており、その言葉がどんな意味を持つのかを改めて確認しなくても会話が成立するほどになっている。前述したように、新聞をはじめとするマスメディアの影響によって90年代以降、急速に「育児不安」という言葉が普及したが、それは同時に育児の当事者である母親の心理状態とうまくマッチしたが故に、広く受け入れられたのであろう。

では、その当時「育児不安」とセットで語られ、不安に陥る元凶となったといわれる「育児書」とは、どのようなものであったのだろうか。母親の育児実践と深く関わっていると思われる「育児書」について、その歴史を概観したのち、授乳法に関する記述内容を分析する。

## 2. 授乳法の近代－母親というアイデンティティ（明治期～大正前期）

### 1) 小児科学と育児書

「育児書」というと、極めて現代的なものというイメージが強いが、近代以前にも存在した

といわれている。どのようなものを「育児書」と定義するかによっても異なるが、日本における育児書発行の変遷を研究している加藤は、「乳幼児を育てるのに参考とすべく書かれた、複数の側面に亘った育児法を指導記述した、両親向けの書物」という定義に当てはめると、最も古い体系的育児書は、16世紀の『退齡小児方』かもしれないと述べている。その後江戸中期のオランダ医学に基づく体系的育児書である『小児必要養育草』(1703年)、後期の『愛育茶譚』(1853年)があげられるという(加藤 1993)。しかし、この頃の主な読み手は母親ではなく、一家の家長である父親に向けて、しつけや教育を扱ったものが多かった(小嶋 a 1989)。

近代国家成立以降の育児書は、明治7年から14年頃までに11冊発行された、アメリカ・イギリス・ドイツ・オーストリアの西欧近代医学に基づく育児書を翻訳したものから始まる。明治15年頃からは、西欧近代医学を学んだ日本人医師が執筆し始め、明治末までに73冊、大正期には33冊、昭和初期(昭和15年頃まで)では、約70冊が認められるという。明治政府が国家の方針として、ドイツ医学の採用を決定したのは、1870(明治3)年のことであったが、育児法と密接に関わる「小児科学」が正式に大学の講座に加わるのは、1888(明治21)年のことであった。ドイツ留学から帰国し、後に育児書の監修や執筆を行なった弘田長が、東京帝国大学で外来診療を始め、翌1889年に教授となり小児科の講義を担当したのが端緒であったという。それ以降各大学や病院に次々と小児科が開設され、1897(明治30)年にはほぼ、小児科学の基礎は固められるに至った(毛利 1972)。近代医学に基づく育児書の出版数は、近代医学の中の小児科学の成立と連動しており、医学と育児はこの頃から非常に馴染みの良い関係であったことが窺い知れる。

このような明治期以降の近代医学に基づく育児書の登場は、それまで連綿と営まれてきた育児を大きく変化させることになった。それは、育児の中でも出生直後からの乳児に対して行われる、子どもが生きていくために必要な生活上の育児方法がマニュアル化したことである。授乳、オムツを含む衣服、沐浴、抱っこといった養育方法は、前近代では伝承によって次世代に受け継がれた。特に、本論で取り上げる「授乳」は、細々とした手順や養育方法について書かれているものは近世以前の書物には見られない。ところが、明治初期から発行された近代医学に基づく育児書には、授乳マニュアルが記述されている。授乳がマニュアルとして記載され始めることによって、「誰がどのように授乳するのか」ということが目に見える形で記述され、それを読む人がそれらを意識するようになる。育児書を読み、マニュアル化された授乳法を実践するという行為は、育児実践を遂行する者にどのような影響を及ぼしたのであろうか。

以上のことを踏まえて、明治維新以降昭和初期までに発行された育児書や、育児について書かれたもの118冊<sup>(14)</sup>を用いて、それらの授乳法に関する記述を分析し、育児書を読み育児を実践するという方法を選択し始めた養育者たちが、どのように主体化されていくのか、また、育児に対してどのような不安や困難、悩みを抱くようになるのかを考察した。

## 2) 授乳マニュアルの登場

分析の過程で明らかになったのは、前近代の育児書には存在しなかった授乳法の手順（授乳マニュアル）が、明治維新以降の育児書に突如として現れることによってもたらされた、養育者への影響である。

### （1）授乳するのは誰か—「人乳」から「母乳」へ

明治期以前、授乳方法が書かれたものが見当たらないのは、人間が哺乳類である限り、妊娠分娩後に授乳をするという行為は、特段に書き留める必要がないほど当たり前のことだったからであろう。小児科医である山本高治郎は、著書『母乳』の中で次のように述べている。

母乳哺育を文字によって記録し、それを後世に残すことはほとんど行われてきませんでした。記録に残すにしては、あまりにも当然すぎることだったからです。当然すぎることは、だれも日記に書かないのと同じです。（中略）何らかの異変を認めない限り、史書は記載の対象とはしないものです。従って、母乳哺育そのものずばりの過去は、伝承の世界において多く語られることになります。（山本 1983）

平安時代から存在したといわれる乳母（うば・めのと）については、その選択の注意点や心得が当時の医書に記載されていたが、具体的な授乳法（細かな授乳の手順や回数、時間など）については、何も書かれていなかった。前近代社会では、出産にあたり産屋を設け、里の母や取り上げ婆が見守る中で出産し、その後に開始される授乳は産後の世話をしてもらう女性に教わりながら習得していったとされる。身近な女性から伝承されるものであり、女性にとっては産後の身体的生理的变化であり、子どもにとっては「生きる」ための本能的な行為であった。それ以上の価値を授乳に見出すことや、方法の良し悪しというような評価が伴うようなことはなかったといえる。

具体的な授乳方法が記述されている資料はほとんどないものの、文化人類学や民俗学の研究から得られた知見によると、前近代では「無制限母乳栄養」というやり方がなされていたといわれている<sup>(15)</sup>。それは、時と場面は全く関係なく、子どもの要求に従って授乳を開始し、時間や量のコントロールはせず欲しがらだけ乳を飲ませるというやり方である。子どもの要求に応答するといった人間の原初的なコミュニケーション行動と、乳を含ませるという最低限のやり方さえわかれば授乳は成立する。つまり、授乳に関して気を遣ったり考えたりする必要はなく、手本としての本も時計も要らない。この特別意識する必要の無い方法が、何かに書き留めるという行為に至らなかった理由であるということもできる。

また、授乳をする者は、子どもを産んだ母（生母）と限ってはいなかった。母は子どもを産み、授乳や養育は乳母が、躾や教育は家長である父親の役目であり、生母が必ず自らの乳を与



えることが当たり前ではなかった。前述した江戸中期のオランダ医学に基づく育児書『小児必要養育草』には、乳母についての記述が授乳の項の大部分を占める。「母の乳」については、「仕方なく」母の乳で育った源義経の子どもも、位高く家も富み、財産が十分にある人に育ったという逸話や、「母の、子をうむこと、是、天理の自然なれば、母の乳汁出つる時を待ちて、飲ましむること、自然の道理なるへし」「産母、病無く、乳汁も、潤沢ならば、母の乳を飲ましめて養ふこと、天理の自然を行ふことになるべし」「家貧しく、財乏しき人は、猶更、母の乳を飲ましめて、養育すべきことなり」（1703年『小児必要養育草』）という程度のことしか書かれていない。つまり、単に自然科学的な視点から、子を産むと乳が出るのが自然であると言っているのみで、生母の乳や授乳の積極的な価値は存在しない。一方で、乳母については、その選び方や乳母の病気が子どもに病を生じさせることなどが十分な紙面を割いて述べられている。これらのことから、生母の授乳よりも重要なのは、良い乳母を選び、授乳だけでなく躰なども含む養育を一切任せるということであったといえよう。

ところが、明治期以降、授乳を担う者が徐々に生母に限定され始める。ここで、育児書の目次に書かれた単語や本文の記述の変遷から、生みの母が授乳の主体になっていく過程を追っていききたい。

稲田は、「『母乳』という成語が育児書に現れたのは1896年『育児必携』においてのこと」と述べている（稲田1990:55）。では、「母乳」という単語が使われるまで、育児書の「乳」の記述はどのような言葉で表されていたのだろうか。明治初期の育児書には「人乳」「獸乳」という単語が使われている。人乳は、生母や乳母やその他の人間の乳のことである。同じ人乳でも、「乳母の乳」に対して、「生母の乳汁」「産母の乳」「実母の乳」などと分けて記述されており、人乳の中でも「生みの母の乳」が最も子どもに適しているとされていた。一方で獸乳とは、人間以外の哺乳類の乳のことで、牛乳や山羊、驢馬の乳などを、人乳が与えられない時には選ぶものとされていた。育児書の目次に着目し、具体的な授乳法の記述がなされている部分の上位項目を拾ってみると、明治期全期間を通じて、「（小児の）食物の事」「哺乳の事」「哺養」「授乳」「乳汁・食物」「哺乳兒養育法」「栄養法」「哺乳法」「乳をのませること」「乳兒の營養」という項目が一般的である。そして、前述の『育児必携』（明治29年）において初めて、「第十四章 母乳」という記述が認められる。ここで、中～小項目での記述内容を見てみると、明治19年発行の『医療捷徑』には既に「嬰兒に恰當なる食餌は素より天与の母乳（ははのちち）に優るものあることなし」といった記述が見られる。その後も「さて小兒の生まれたる時は如何なる方法にて養育すれば宜しきやといへば第一温湯にて沐浴せしめ次に母乳（ちち）を飲ましむるが西洋の風にて（後略）」（明治21年『婦人必読通俗女子教育要論』）、同じ年に発行された『通俗育児小話』にも「母乳 凡そ小兒は齒牙が無く胃も弱きものなれば之か栄養に供すべき食物も喫むことを要せず 又胃中に入りて消化し易きものを選ばざる可らず 母乳は最も之に適したるものなり」といったように、文中に「母乳」という言葉が散見される

ようになる。明治 35 年以降には、大項目にも「母乳」「母乳養育」「母乳栄養」が頻繁に見られはじめ、「母乳」のルビが「ははのちち」から「ほにゅう」に変化し、現在の「母乳（ほにゅう）」が定着するに至った。このことから、「生母の乳＝母乳」という理解が定着したのは、明治 35 年以降と推測される。

「人乳」から「母乳」へという言葉の変化とはほぼ呼応するかたちで、「誰が授乳をするのか」という授乳の主体をめぐる闘争も存在した。乳母の授乳が当たり前だった時代から、生母の授乳に価値が置かれはじめた契機は、明治 14 年頃までに出版された翻訳育児書であった。これらには江戸期のものとは大きく異なる記述があった。

凡そ人の母たるもの心身を勞し力の及ぶところ常にその小兒の健全幸福を謀らざるべからず（明治 9 年『智巴士氏 育児小言 初篇』）

人の母親となり其義務を盡し小兒を養育するは實に人の妻たる婦女に取りては小事と為す可きことに非ず 故に母親たる名に背かざる様万事に注目留意て其の小兒を養育するの前に当り多少の勞を盡し如何の方法を以て其兒を養育するかと知らざるべからず

小兒出生の後始て大氣を呼吸するに際り是より其身体に疾病を起し或は健康に成長すも皆母親の注意如何にある者なり（以上、明治 12 年『母親之義務並育児法』）

死ると生るの界まで、皆これ母の取扱に依る者なり（明治 14 年『育児須知』）

母親の役割を明確に規定し、子どもに躾や教育を施す前の乳幼児の段階での健康が、母親のやり方如何にかかっていることを強調している。このような新たな母親役割を発見するに至った社会背景を小嶋は次のように説明している。「幕末から明治初めにかけて欧米に派遣された日本人が深く印象づけられた対象の一つは、欧米の母親であった。彼らは、欧米の中・上流の知性豊かな母親が、家庭を効率よく管理し、子どものしつけと教育に指導的役割を果たしている姿に感銘し、日本でも女子教育が必要なことを痛感した。かれらは、産業社会化の道を歩もうとしている日本が国家の富強を図る手段として、家庭の教育力に着目し、その手段として女子教育を図る必要性を認めたのである。（小嶋 1989 b : 27）」<sup>(16)</sup> 明治後期から大正期にかけて台頭してくる良妻賢母主義教育の影響以前に、育児の中心は母親であることを強く印象付けた翻訳育児書は、その後に書かれた日本人による育児書の内容にも大きな影響を与えた。前近代的な習俗に基づく育児方法を否定し、母親による「正しい」授乳法によって子どもの命と健康が守られると説いたのである。

では、その「正しい」授乳法とは何であったのだろうか。明治期に発行された育児書には、かつて一言も触れていなかった細かな授乳方法が、手順とともに記述されはじめる。

## (2) マニュアル化する授乳法—時間決め授乳の登場

時とき指先にて乳房を押さえて飲ませ乳児の呼吸を妨げぬように注意すべし 又乳を飲みながら眠らしむべからず (明治12年『女子宝鑑』)

乳房不潔なときは驚口瘡を生ずることありて哺乳を妨げ甚だしきは死亡を致すゆえ哺乳しむる前に乳房を清浄に拭ふと (明治16年『育児の種』)

小児乳を飲んで後ち十分間は最と静かに懷き居るべし (明治27年『男女育児法』)

乳を哺するには左と右とを交互に用ひます。而して乳房は授乳毎に一度煮て微温したる清潔な湯に浸したる布片で洗ふがよろしい 是れは最必要のことであります (明治33年『育児の心得』)

授乳の前には乳房や手、児の口の中を拭いて清潔にすること、左右交互に飲ませること、飲ませるときは、乳房を押さえて乳児の呼吸を妨げないようにすること、授乳後10分間は抱いておくことなど、授乳の姿勢や方法、時間や留意点を説明している。この授乳方法の記述は、小児科学の発展とともにより厳密になっていく。「時間決め授乳」の登場である。

「初月及び次月は一時乃至1時半毎、第三月より二時間乃至二時半毎、第六、七月より満一歳までは三乃至四時間毎」(明治14年『育児須知 上巻』)「哺乳の時間は規則正しく定めおくこと肝要なり、(中略)一回の分量は母の乳の出具合によりて一様ならされども、通例十分間または十五分間にて沢山なり」(明治31年『農家の細君』)というように、出生後からの月数で、授乳回数が決められ、一回あたりの時間も「母の乳の出具合によりて一様」ではないが、10～15分で十分であるとしている。なぜこのように回数と時間にこだわり、厳格な授乳を勧めたのであろうか。

哺乳の時間を守ることに固より肝要なることながら、亦乳汁の分量を制限することも知らざるべからず、大人すら暴飲過食は身軀を害ふの本源なるを、ましてか弱なる嬰兒の身軀いかで乳汁を過して可なるべき、如何に滋養になる乳汁にても、未だ歯も生えず胃腸の働きも十分ならざる嬰兒の身体なれば、慎みて与え過ぎざらんこと注意すべきなり、凡そ小児の病は多く消食器を傷ふに起因するものなり、ある統計学者の実験によれば満一年以内に死去したる小児百人のうち五十人以上は、皆消食器病に犯されたるものなりといふ、如何に恐るべき次第にあらずや、又乳汁を与へ過ぎは独り嬰兒の健康を害するのみならず、産婦の身体にも大に其の影響を及ぼすなり、なんとなれば人乳は、一日二十四時間に七合五勺乃至一升を婦人の血液中より製造せらるるものなれば、一日に此の分量より多く与ふるときは、忽ち供給不足を告げ、随て母の身体の栄養分を減却し、大に其の衰弱を惹起するものなればなり、されば哺乳の分量を制限せざるは母子共に其の健康を害するものと知る

べきなり（明治 33 年『男女生殖健全法』）

このように、「科学的根拠」を踏まえて、「飲ませすぎの害」で子どもは消化器を害し、母親は栄養不足となり、母子共に健康を害する結果になるという理由で、無制限に母乳を与えることを戒めている。「お乳は二時間以上三時間位、必ず時を隔てて規則正しく与らなければ、遂には消化不良という症を起し、折角掌中に入れた珠をむざむざと彼の世の使に取り去るる不幸をみることに至るべし」（明治 42 年『育児活法 一名母親の丹誠』）というように、せつかく生まれた子どもが、「正しい授乳法」をしないことで死ぬという不幸な結果に陥ることもあると述べている<sup>(17)</sup>。

育児書上で正しい授乳法として紹介される「時間決め授乳」は、授乳が子どもに及ぼす影響を可視化させ、実践する母親に対して、「授乳する私」のやり方次第で、子どもが病気になったり、あるいは健康に育ったり、時には生死を分かちことになることも自覚していくことになる。それは、母親にとって、自らが行なった授乳法によって、授乳対象である子どもの生死が左右されるという、ある意味では単純な基準であるが、育児の評価がそこでなされるということを目指している。「授乳する私」という、子どもの生死に関してある程度の責任を自覚し、自らの実践によってそれが左右されることに気づき始めた母親であるがゆえに抱く「不安」は、育児の最低限の目標である「子どもを死なせないこと」に対する緊張感と、子どもを死なせることに対する「恐れ」であった。そしてもうひとつは、授乳の主体として規定された母親が、授乳法の手順が書かれているものを「読む」ということ、同時に「読んで実践する、しようとする」ことがもたらした影響である。母親たちは、育児書に記述されている「子どもを死なせないため」の「正しい授乳法」としての「時間決め授乳」を忠実に実行しようとした。それは、自らが行う授乳法が子どもの生死を左右するということが、マニュアルを「読む」ことで結びついたからである。従って、明治期から大正前期にかけての母親たちは、授乳マニュアルの登場によって、「授乳する私」という自覚を持ち始め、育児書で正しいとされた「時間決め授乳」を、マニュアルにそって忠実に遂行するように主体化された。このような前近代の状況とは異なる授乳法の手順の提示は、子どもの生死を分けるのは母親の授乳方法であることを意識し始め、「子どもを死なせないような授乳を行う私」というアイデンティティの獲得と同時に、育児に対する重圧を感じ始める契機となったといえよう。

### 3. 授乳法の高度化―再帰的母性の出現（大正後期～昭和初期）

#### 1) 授乳マニュアルの厳格化

明治期に発行された西洋医学をベースに書かれた育児書は、授乳法のマニュアル（時間決め授乳や細かな手順）を提示し、それを読む母親に、「授乳（育児）をする私」という自覚を持

つことを促した。それは、育児書に記述されている授乳法を、「子どもを生かすため」に遂行する主体が立ち上がる契機となった。

大正3年に発行された『最新育児法講話』は、明治期の育児書とは一線を画す記述が見られる。著者の長尾美知は、明治期に小児科専門書を医学生や実地医家向けに記した『近世兒科学』を発行した後、ヨーロッパへ留学する。帰国後に『最新育児法講話』を書いた。その本の序文には、次のような文章がある。

欧米の先進国にては、育児の忽にすべからざるを思ひて医学大家は勿論、心理学者も社会学者も俱に與に之が研究に余念無く、為政者の苦心施設実に見るべきものあり、翻て之を我國の現状に考ふるに轉た嗟歎に堪へざるを覚ゆ

『最新育児法講話』は、「学理の研究に励みつつ社会の進展に貢献する」という、長尾の学者としてのあり方を通して、日本の育児が未だ学際的な研究対象になっておらず、科学的育児法の啓蒙も進まないことを憂いて、『近世兒科学』を解りやすく一般向けに書き直したものであった。明治期の育児書と異なるのは、「小児の身体の特異性」を丁寧に説明し、その後に具体的な育て方やよく見られる疾患の解説を記述しているところであろう。目次の大項目を拾ってみると、「第一章 総論」の次に「第二章 小児の發育」「第三章 小児の生理」という小児の解剖生理学的特性から始まり、「第四章 小児養育の注意」と続く。第一章では、「一般の母親－哺育者たるものは、是非育児法の一通り－殊に嬰兒の簡単な生理・病理を心得て、其の子の健全な發育を願はねばなりません。」と述べている<sup>(18)</sup>。

こどもの本体をよく知ること　こどもの身体は成人の身体と趣を異にしたもので、成人の身体を小さくしたのがこどもの身体だと思つては間違ひである。(大正12年『育児の心得』)

コドモを育てるときに起こる大きな間違ひはコドモのからだのことをよく知らぬのが本になって居ます。(大正13年『家庭こども相談』)

このように、「子ども」という育児の対象は、より緻密に詳細に身体データをを用いて捉えなおされた。そのデータを基にして授乳法は厳格さを増していく。

それで一回に吞ます分量が、又問題になりますが、乳呑子の胃袋の大きさは、生後九ヶ月で五勺位、九七ヶ月で一合位、九十一ヶ月で一合五勺と御記憶下さい。(昭和4年『結婚読本』)

若し消化せぬ前に又次ぎの乳を与へるとカゼイン凝固物が胃の中にあるうちに次の乳が来

るから、これが元の凝固物の周囲に固まる。かくて次から来るものがこの凝固の周囲をますます取囲むのである。そして消化するのは外の方からであるから中の方は古い乳が残って居るわけである。これが変敗してきては消化不良症を起こすようになるのである。（大正 12 年『育児の心得』）

子ども特有の胃の形状や消化の仕方、胃の容量、発育に必要なカロリー量といった医学や栄養学の実験研究から導き出す「学理」から、授乳回数と一回量を定め、「時間決め授乳」の強力な根拠としている。当時出産した母親の実母や姑は、前近代的な授乳法を経験している。従って、年長の同居人と授乳法の考え方の違いで揉めることが多かったようである。

先ず、母乳分泌の良否と乳児発育との善悪とを能く見定めまして最初に一昼夜の授乳回数を定め、それに依って小学校生徒の学課時刻表のやうな『授乳時刻表』良いふものを作り、其れを紙片に書き記して居室の壁にでも張り付けておきます、すると、これに依って第一に母親自身が前回の授乳時刻を忘れてたりするやうなことはなくなり、更に、それが家庭の人々の眼につきますから、老人なども始めから時間制度であることを承知して減多に小言を云はなくなり、家中のものが自然に一致して授乳時刻を赤坊に守らせることになりますから、万事非常に好都合であります。（昭和 3 年『乳児及び幼児の育て方と其看護法』）

姑などを「老人」と称して、そのような家の者に授乳時刻を守らせるためには、「授乳時刻表」という目に見えるものを作って時間を決めて授乳していることを知らしめれば、小言も言わなくなり「正しい授乳法」が遂行できる、と述べている。マニュアルに提示される時間決め授乳を「正しい授乳法」と理解し、周囲も巻き込んで厳格に実践しようとするのであるが、思わぬところで足元をすくわれることになる。

## 2) 戸惑う母親—「学理」通りにならない子ども

「学理」による子どもの捉え方に対して、その有効性を認めながらも異を唱える育児書が登場する。それは、マニュアルを信じて実践してきた母親にとっては青天の霹靂であった。新たに登場した育児書は、「学理」に基づくリジッドな授乳を主張する一方で、「経験」としての子どもの個別性を根拠にした、「臨機応変」な授乳をも擁護する。いわば、マニュアルの自己否定は、育児書を読む母親にとって、何を拠り所にして授乳をすればよいのかという戸惑いと悩みを抱かせるものであった。その母親たちの戸惑いは、授乳の評価システムを生み出し、自らが授乳の結果を背負う責任者として主体化されていく。

「僕は生まれたばかりの赤ちゃんです」というのはしがきから始まる、医師高田義一郎の『赤

ちゃんから両親へ＝赤ちゃんの自治自衛論＝』（昭和4年）は、高等女学校出身の「母ちゃん」と大学出のサラリーマン「父ちゃん」との間に初めて出来た赤ちゃん（＝僕）が、親の育児を子どもの立場で語るスタイルで書かれたものである。もし赤ちゃんが大人と同じような言葉を話すことができれば、「無知」な両親にどんなことを訴え教えたかということ、話し言葉で記述している。ここに登場する夫婦は、当時としては高学歴で新中間層に属している。

（前略）いつも家に来る医者ーいや、これは失礼、先生と改めませうーが四時間おきに五分間ずつ飲まして、それ以外には一滴たりとも与へるなど言ったのを、母ちゃんは育児の金科玉条として、僕が空腹に苦しんで、腹の皮が背骨へ密着するかと思ふくらいになっても、時計を眺めながら、いともいとも冷かに、「坊や！まだ三時間と四十五分ですよ。もう十五分しなければ、おっぱいはあげられないわ。」と慈愛の眼をおむけになりますが、この四時間の厳守に就いて、僕は太に異議があるんです。（中略）ご覧なさい！僕が、あの若先生の四時間説励行の犠牲として、可憐にも昨今、如何にガリガリに痩せておるかを！ （中略）

僕は赤ちゃんであって、これ以上、赤化のしやうもありませんが、咽喉も裂けるばかりに叫んでいる僕の悲痛な絶叫が、パンを与へよといふ、失業者の声と同一のものといふことに、未だ気がつかないとは、お手軽な科学心酔の弊害として呪はるべきものだと思いますよ。

育児書で盛んに勧められている「正しい授乳法」が、「学理」一辺倒で、実際には役に立たないどころか害悪までもたらしていることを皮肉っているようである。また、子どもの視点で語ることが、授乳対象としての「子ども」の存在を強調し、育児書の記述に盲目に追従する母親に対して、育てられる側の反応や思いにも目を向けるように促しているようにも取れる。この本の著者である高田義一郎は、大正後期から昭和初期にかけて、『結婚読本』『実例育ての「こつ」』『愛児と共に』など、他とは一風変わった視点で、結婚から妊娠～育児までの実用書を数多く出版している。彼の著作を貫くのは、徹底した経験主義であった。医師として日々患者の子どもと接する経験と、自分自身が親として子どもと関わる経験から、たとえ「学理」通りに実践したとしても、実際の子どもの育ちには問題が発生してくるという、言わば理想と現実のギャップを詳かにした。しかし、これと同じようなことを指摘したのは高田だけではなかった。

子供が泣くたびに乳を飲ませる一般無教育者に雷同せよといふのではないが、かかる無方針で育てている子供が存外よく肥えているのに反し、育児法の書物を眺めつつ首引して育てている子供が却って発育が悪いといふことは、常に聞くことでもあり、またかかる実例

に遭遇することが非常に多いのである、それゆえ人々が医者の子育法を馬鹿にする結果となる。千差万別多種多様であるべき乳の分泌量と、子供の需要量とを略々一定のものと仮定して、それを基礎として立論する自然科学の立脚地を世人が誤解しているから起る誤りである。（大正 14 年『こどもとはは』）

基本的な「学理」は間違えていないが、育児書を読み取り、実践する者の捉え方が間違っていると云わんばかりである。また、その他の育児書の記述も「発育の状況に依って加減して」「子供の自由に任せる」「相手は生き物のことですから」「同じ位の発育程度の健康な乳児に於いても其の栄養方法にいろいろと加減を施す必要がある」など、曖昧な表現が見られるようになる。「学理」通りに育たない子どもを目の当たりにして、機械のように一定の反応をする単純な個体としての捉え方から、個々にばらばらな身体条件を持ち、同じことを実践しても様々な反応をする生き物として捉え直された。つまり、望ましい発育をさせようと思えば、授乳する者が子どもの状況によって臨機応変に加減する必要がある、ということを示唆している。

### 3) 授乳自己評価システムの成立―戸惑う母親が身につけた評価態度

授乳において「臨機応変さ」を求める育児書は、子どもの理解のための基準値やマニュアルを一旦全て引き受けた上で、実践段階ではそれらを全て母親に投げ返す。つまり、母親自身が育児書の知識やマニュアルを受け止めた後は、子どもの反応を見ながら、如何なる方法で実践していくのかということの判断や決定を、全て母親の責任において行っていくように主体化されたのである。「子ども」という複雑な反応をする捉え難い存在に対して授乳をするとき、母親は自ら行っている方法が正しいことなのか、あるいは適切であるのかを常に評価する眼差しを自らに向けなければならない。マニュアルに沿って授乳を実践し、子どもの反応をみてそれを評価し、次の実践につなげるという、授乳法の自己評価システムが母親の意識下に形成される。自ら行ったことに対する反省をしながら、子どもにもたらされる授乳の結果を全て引き受け、結果によって授乳に改善を加えていくという一連の行為を行う、再帰的方法を身に付けることとなった。授乳マニュアルの遂行者でしかなかった母親は、大正後期以降、子どもの成長発育の結果責任を負う母親へと変わらざるを得なかった。それは自ら行った授乳を評価する方法と視点をも獲得するということである。近代医学を基にした授乳法では、それを評価するのも当然のことながら近代医学の視点となる。医者に従うだけではなく再帰的態度を身に付けた母親は、自ら行った授乳を医学専門家的な視点から分析し、評価し、その結果を受けてやり方を変更するといった一連の自己評価システムを内面化する。一方で、評価するための基準をも医学に求め、再び育児書の記述に新たなマニュアルを見出した。

問 女児生後五十日迄は母乳をあたへましたところ、五十日後は体重の栄養不良に陥りま



した。それからミルクを与へましたら、ミルク授乳後二十時間ほどで黄色のいい便を見ました。それからだんだん太って来ましたが、生後百七十五日の今、普通健康児より甚だ小さいのです。今ミルク一温湯一・五の割で四時間後に飲ましています。

一、強壯にしてよく太る様にするにはどうしたらよろしいか。

二、今取らうとうする方法に誤りはないでせうか。

三、ミルクをオモユで溶しては悪いですか。

四、さきに栄養不良になった原因。

五、ビタミンの補欠にするため、夏ミカンに砂糖を加へ与へて下痢しました。これは全然いけないことですか。又は方法がいけないのでせうか。(大分県南海部郡 高橋すい子)  
(大正13年『家庭こども相談』乳児期相談 栄養の部より)

お乳汁を飲ませている間はどんな時であらうとも必ず真面目でなければいけません。(中略)何か変はった事がありはしないかと些細な点まで注意して観察する事を務めとする気になって居なければなりません。「おや、何だかへんな飲み方をする」と気が付いたならば直ぐ「どうしてこうなのだらう」と調べて見ねばならんのです。(大正14年『育児集談 母のつとめ』)

同じ着物を着せて、授乳の前後の赤ん坊の目方を計ります。その差が飲んだ母乳の目方です。幾度も計ればお乳の量の変化及び一日中に出る乳の量が分かります。(昭和7年『正しき育児法』)(以上、アンダーライン筆者)

現代では、普通に行われている育児相談であるが、専門家に相談するためには、今の状況を相手に的確に伝える能力が必要である。生後何日か、どんな便をしているか、授乳はどのように行っているかなど、客観的な情報を得て相手に伝えようとするならば、医学に基づく子どもの身体や育児についての基礎知識や思考過程を身につけていなければならない。それをどこで身につけるかという、やはり育児書を読むことによってなされる。授乳マニュアルを遂行する母親は、実践し、結果を育児書の情報によって評価し、望ましい育ち方をしているかどうかを判断し、望ましくないのであれば改善する。ところが、望ましい子どもの育ち方は、数字だけでは示されなかった。

良く栄養せられた子供の動作はいかにも生き生きしているものである。笑ひ顔を見ても、如何にも嬉しくてたまらぬといふように身体全体を以って笑ふものである。

(大正14年『愛育の本 乳児の巻』)

「育児法」には、子供を健康にして、丸々と肥満させる方法を説いている。しかし、子供を健康にし丸々と肥満させるのみでは、農科大学で講義するところの養豚や養兎の方法と大差がないのではあるまいか。豚や兎等の家畜ならば、健全で肥満してくれさへすれば、

それで十分であるけれども、人の子はそれだけではいけない。医者として患者に対する義務ならば、それだけで十分であって、それ以上を望むのは無理であらうが、親として子供に対する場合には、それだけで満足できる筈はないのである。

（昭和 11 年『事例 育ての「こつ」-彼女は如何にして子育てに失敗したか-』）  
（以上、アンダーライン筆者）

育児書で語られた授乳の効果としての子どもの状態は、明治期では「死ぬか生きるか」「健康か不健康か」であった。しかし大正後期から昭和初期になると、子どもの体重増加という数字で表現されるもの以外に、望ましいとされる子どもの状態が主観的で抽象的なものにまで及んだ。子どもが生きてさえいたらよい、あるいは適切な授乳によって体重が増え成長する、というだけでは、「育児の専門家」としての医者のお墨付きはもらえないことに気づく。まるで PDCA サイクルを回すが如く、「より良い子どもの成長」という高度な育児目標を達成せねばならない母親として主体化されていくのである。授乳であれ、その他の育児実践であれ、自らが行ったことを自らが評価するという方法を身につけたとき、結果の責任は全て自らが負うという責任感も同時に形成される。現代において、育児の主な担い手と責任が母親のみに集中していることが、育児に負担感やストレスの原因になっていると言われている。それは、まさにこの大正後期から昭和初期にかけての再帰的母性の出現こそが、現代にも繋がる「育児不安」の源流ではないだろうか。

#### 4. 終わりに一再帰的母性の苦悩と不安

大正後期以降に母親が身につけた授乳自己評価システムは、現代においても、その他の細かな育児方法全般についても同様に機能していると思われる。現代では育児書という紙媒体だけでなく、新たな育児に対する考え方や方法について、非常に多くの情報がインターネットによって誰でも手軽に入手できるようになっている。「より良い子どもに育てる」といった母親に課せられた根本的命題は今でも生き続けており、授乳をはじめとする育児全般の自己評価システムはより高度化している。なぜならば、多くの情報の中から何を選択するのかという情報リテラシー能力も身につけるように、と多くの専門家たちが述べているからである。紙媒体の育児書しかなかった時代と比較すると、母親の育児に対する自己評価システムは、情報入手の段階から取捨選択を迫られるが故に、システムが稼働する前段階で混乱や苦悩が始まっている。

また、現代の母親の育児不安、困難感の軽減を前提として、父親の育児参加や地域での子育てサポートの充実を図る政策が実行されている。確かにそれは育児実践の段階での身体的負担を軽減することに繋がってはいるだろう。しかし、再帰的母性を内面化した母親という主体は、育児の最終責任者という地位を降りてしまうことは不可能である。つまり、育児を手伝っ

てくれる人が周囲に多くいたとしても、育児主体としての責任が軽くなるわけではなく、心理的な不安や負担感は無くならない。それ以上に、実践部分を他人に任せることによって、その評価や反省、改善といった一連の自己評価システムが上手く稼働しなくなるといった事態になる可能性もあり、それもまた不安に繋がるといった悪循環を生むかもしれない。明治期以降の授乳法のマニュアル化を代表とする「近代的な育児」は、結果的に、子を育てるという「母親」という自覚を持つ主体を作り出し、次の段階で、その構造を変えつつ母親は自覚と責任をより強く感じるように主体化された。自らの育児実践を評価し、反省し、改善をしていくという自己内のシステムを抱えてしまった困難さや不安は、現代の「育児不安」の根底にあるものなのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 「雑誌記事索引集成データベース」で、「育児不安」をキーワードに検索すると、2021年現在まで1096件の論文と記事がヒットする。最も多いのは、2000年から2010年の10年間で605件であり、その後は微減し続けている。URL <http://info.zassaku-plus.com/> 2021年4月27日閲覧
- (2) 育児不安研究の先駆者である牧野カツ子は、「育児不安」を「無力感や疲労感あるいは意欲の低下などの生理現象を伴ってある期間持続している情緒の状態あるいは態度を意味している」とし、身体的精神的症状を伴い、実際の育児に支障を来すような状態と定義している（牧野1982）。今で言うなら「産後うつ」に近い病的な状態と言ってもよい。一方で『社会福祉辞典』（2002年）には、「乳幼児を養育中の母親が育児に疲れたり、子どもの発育や子育て全般にわたる心配事が絶えず心理的緊張が増大した状態を言う」と定義している。
- (3) 朝日新聞「サザエさんをさがして 育児書」2005年2月26日版別刷 コラムの一節
- (4) 信濃毎日新聞社編 2002『迷い道：子育ては、今』河出書房新社
- (5) 2005年に公開され大ヒットした映画「ALWAYS 三丁目の夕陽」は、昭和30年代ブームの火付け役であった。「貧しかったが夢があった」「人間関係が暖かかった」というような昭和への憧憬は、この頃の育児空間を望ましいものとするメッセージが感じられる。
- (6) 朝日新聞 2005年11月24日付 インタビュー記事
- (7) 厚生労働省は2007年より、「地域子育て支援拠点事業」を推し進め、母親の孤立を防ぎ、仲間づくりと「地域で子どもを育む」ことで、社会問題化する育児不安や困難感の打開策とした。現在でも継続されている事業である。
- (8) よく使われる文言であるが、積極的に世代間のネットワークを切断するようにあえて仕向けていたのは、医者であり、医者が書いた育児書である、という意見もある（横山1986）。
- (9) 老川寛監修 2001『家族研究論文資料集成 明治・大正・昭和前期篇』第12巻 家族の機能（1）クレス出版、草間八十雄 1921「幼児保育と夫妻共働の実状」『社会事業』第5巻第8号 中央社会事業協会社会事業研究所、岡村准一 1922「独逸に於ける育児事業」『社会事業』第6巻第9・10号 中央社会事業協会社会事業研究所、など、育児制度や西欧の制度の研究などが目立つ。
- (10) 『育児雑誌』は、「日本児童協会」という組織が、大正9年7月に『日本児童協会時報』として出版し、大正13年からは『育児雑誌』と名前を変えて昭和3年まで続いたものである。昭和4年からは『母と子』として昭和18年まで継続された。「日本児童協会」は、医学者・ドクトルである三田谷啓によって大阪市に設立された。その目的は、家庭改造、社会改造、国家改造の出発点としての子どもの改造、児童教養に関する理論と実際の懸け橋、専門家による親の指導・援助の3点に集約できるという。協会の顧問には、医学博士大久保直穆や唐沢光徳、文学・医学者の富士川游、薬学

博士の高島平三郎らが名を連ねていた（首藤 2004：67-69）。

- (11) 経験談風のものや、子どもの立場から書いたものなどバラエティーに富んでいたという。内容も、心理学者が育児書に登場するようになり、子どもの心理にも目を向けるように論じている。また、教育や進路のことまで含んだ育児書が出版始め、新生児期から学童、青年まで子育ての範疇に捉えられるようになった。「育児」や「子ども」が「完全に一つの時代的主題」になったと横山（1986）は指摘する。
- (12) ドナルド・ウィニコット（1896-1971）はイギリスの小児科医であり、精神分析家である。母親－乳幼児関係の理論で、「赤ん坊と母親の関係を出発点として、人と人がどのように出会うのか」について論じている。高度経済成長期以降、母子関係を重視する風潮のきっかけとなったと思われる。  
日本ウィニコット協会ホームページ「ウィニコットの主な理論」「日本におけるウィニコット受容の歴史」URL <https://www.winnicottforum.com/about/> 2021年4月25日閲覧
- (13) 日本児童学会員であった小児科医の高橋種昭と中一郎の論文である。ここに出てくる「育児不安」は、現在のイメージとは違っている。不安の強いパーソナリティを持つ母親は育児に対しても不安を抱きやすいという結論であるが、調査のための質問項目には、「子どもの夜泣きがひどくアパートの隣人から苦情が出ています。あなたがその母親の立場ならどうしますか」「子どもが鼻風邪になったときお風呂をどうするか」というものがあり、困った状況に対する対処のパターンを問うている。考察では、「『育児不安』とは、いったいどういうことなのだろうか」という疑問にぶつかる」などと書かれている。
- (14) 分析した育児書 118 冊の時代別内訳は、明治期 52 冊、大正期 29 冊、昭和前期（終戦まで）37 冊である。
- (15) マーガレット・ミードとともに未開社会を調査した、心理学者・文化人類学者のナイルズ・ニュートンが提唱したといわれている（山本 1983：59-61）。
- (16) 明治 5 年の学制発布によって男女の別なく女子も八年制の尋常小学校を必ず卒業すべきものと定めた理由に、「母としての教育」という趣旨を認めることはできない。学制の規定は男女共通教育であり、男子と同じ教材を学習することになっていた。女学校でも、女学といいながら一般教育を重視した西欧志向的な教育を実践していたことから、より良い母となるために高度な一般教育を与える必要がある、というのは理論的に矛盾しないが思想的には飛躍がある（深谷 1981）。この点を考慮すると、明治初期の女子教育の必要性は、「母としての教育」も含み込んでいたが、だからといって育児や家事といった女子のみを対象にした教育を目指したわけではないということになる。いわゆる「良妻賢母主義」は明治 30 年ごろに台頭したものであり、明治初期には女子教育の必要性が説かれたことと、西欧の育児書の翻訳が盛んになされたこととの関連性は疑問である。
- (17) 明治 32 年から大正 2 年までの 15 年における乳児死亡原因の主なもの、呼吸器疾患と消化器疾患であった。上下水道整備の立ち遅れから、疫痢や赤痢、コレラ、腸チフスといった消化器伝染病が猛威を振るった。しかし、それよりも多かったのは呼吸器疾患で、その基礎には、栄養状態の不良や居住条件を主とする衛生状態の悪さを十分に窺い知ることができる。（毛利 1972）従って、母乳の「飲ませすぎの害」は、感染疾患だった可能性も十分にありえる。
- (18) 明治期の育児書の構成は、大きく分けて 3 つのパターンがある。第一は「初生児」「生菌までの栄養と育児」「生菌後の栄養」など、大まかな成長段階毎に授乳や育児法を述べているもの、第二のパターンは、哺乳や栄養法に大方の誌面を割き、付け足し程度に入浴や衣服、睡眠について述べているもの、第三は、一話完結のコラムのように内容をランダムに述べているものである。述べられているこの内容はほぼどの本も共通しているが、その並び方はばらばらで決まった型というものがない。授乳の項目だけは「自然栄養（母乳栄養）」「乳母栄養」「人工栄養法」という順番で記述されているが、その他の養育法は思いつくまま述べている印象がある。

〔文献〕

- 阿部和子・柴崎正行・阿部栄子・是澤博昭・坪井瞳・加藤紫識, 2014, 「近代日本における育児行為と育児用品に見られる子育ての変化に関する一考察」『人間生活文化研究』24; 245-264
- 赤川学, 2006, 『構築主義を再構築する』勁草書房; 9
- 深谷昌志, 1981, 『増補 良妻賢母主義の教育』黎明書房
- 一番ヶ瀬康子他監修, 社会福祉辞典編集委員会編, 2002, 『社会福祉辞典』大月書店
- 稲田ゆかり, 1990, 「近代育児法成立期における母親役割論－1880年～1910年の育児書を手がかりに」『お茶の水女子大学女性文化研究センター年報』4
- 加藤翠, 1993, 「わが国における育児書発行の変遷」『日本女子大学紀要 家政学部』40
- 上笙一郎, 2000, 『子育てところと知恵－今とむかし－』赤ちゃん和妈妈社
- 小嶋秀夫, 1989 a, 『子育ての伝統を訪ねて』新曜社; 78-80
- 1989 b, 「明治初期の翻訳育児書」『日本医史学雑誌』35(1); 26-43
- 小山静子, 1991, 『良妻賢母という規範』勁草書房; 14-25
- 興梠忠夫, 1985, 「育児の温故知新－130年前の育児書から現代のお母さんへ」『愛育』50(8); 38-39
- 牧野カツ子, 1982, 「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家政教育研究所紀要』3
- 毛利子来, 1972, 「現代日本小児保健史」ドメス出版; 54-55
- 丹羽洋子, 1984, 「今日の育児不安と育児書」『教育』教育科学研究会編 34(3); 27-34
- 堺美砂子・一ノ山隆司・村上満・岩城敏之, 2018, 「母親の育児不安に関する国内文献の動向－文献タイトルのテキストマイニング分析－」『性ところ』9(1); 167-172
- 澤田啓司, 1983, 「育児書の歴史」『愛育』48(3); 4-7
- 佐藤裕紀子, 2004, 「明治・大正期高等女学校の家事教科書にみる時間教育」『日本家庭科教育学会誌』47(3)
- 沢山美果子, 1986, 「近代日本の家族と子育て思想－新中間層における教育家族の誕生と〈童心主義〉子ども観」『順正短期大学研究紀要』15
- 品田友美, 2004, 『〈子育て法〉革命 親の主体性を取り戻す』中公新書; 24
- 首藤美香子, 2004, 『近代的育児観への転換 啓蒙家三田谷啓と1920年代』勁草書房; 67-69
- 住田正樹・溝田めぐみ, 2002, 「母親の育児不安と育児サークル」『九州大学大学院教育学研究紀要』3; 23
- 立川昭二, 1986, 『明治医事往来』新潮社
- 高橋種昭・中一郎, 1976, 「母性の精神衛生に関する研究－育児不安を中心にして」『児童研究』55(1); 53-81
- 上野恵子・穴田和子・浅生慶子・内藤圭・竹中真輝, 2010, 「文献の動向から見た育児不安の時代的変遷」『西南学院大学紀要』14; 185-196
- 山本高治郎, 1983, 『母乳』岩波新書; 69
- 山住正己・中江和恵編注, 1976, 『子育ての書 1』平凡社
- 横山浩司, 1986, 『子育ての社会史』勁草書房; 217-224
- 吉長真子, 1997, 「昭和戦前期における出産の変容と『母性の教化』－恩賜財団愛育会による愛育村事業を中心に－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』37; 21-29

〔育児書〕

(江戸期)

香月牛山, 1703, 『小児必要養育草』

(明治期)

バイ・ヘンリー・チャアス 澤田俊三訳, 1876, 『育児小言 初編』気海楼

〈育児不安〉と主体化される母親たち（木下純子）

- フリードリヒ・アウグスト・アンモン 三宅虎太訳, 1879, 『母親之義務並育児法 上巻』文会堂  
ボル 杉山由哲訳, 1881, 『育児須知』  
矢守貫一, 1883, 『育児の種』矢守貫一  
鳥谷部政人, 1886, 『医療捷徑』内科新論出版事務所  
一々学人編, 1888, 『哺乳児養育問答』晩翠堂医院  
中村正道, 1893, 『小児養育法』博文館  
進藤玄敬, 1894, 『育児必携 乳の友』博文館  
中井龍之助, 1896, 『育児必携』成功堂  
的場セイ之助, 1898, 『育児の栞 家庭全書第二編』大阪尚文堂  
三島通良, 1899, 『ははのつとめ』波蘭堂  
長澤亘, 1900, 『育児の心得』金原寅作  
東京衛生協会編, 1903, 『育児衛生顧問 一名・母親の心得』文昌堂  
唐澤光徳, 1905, 『育児のはなし』吐鳳堂  
帝国保育会編, 1909, 『育児活法』右文館  
吉田賢子, 1910, 『妊婦必読 安産の心得』宇宙堂  
長尾美知, 1910, 『近世兒科学 増訂2版』東京名文館  
(大正期)  
長尾美知, 1914, 『最新育児法講話』東亞堂書房  
高橋毅・伊藤常子, 1916, 『育児三年：一名子供を健全に育つる方法』弘学館書店  
河合三郎, 1916, 『不用意が招く愛児の死』洛陽堂  
吉岡弥生, 1919, 『結婚より育児まで』東盛堂  
三田谷啓, 1923, 『育児の心得』同文館  
内務省衛生局, 1923, 『育児と衛生』方文館  
高橋ミチ子, 1924, 『楽理と経験に基く新育児法と看護の仕方』文化生活研究所  
週刊朝日編, 1924, 『家庭こども相談』朝日新聞社  
長尾美知, 1924, 『学理と実際 乳のみ児を健に育てる為に』白揚社  
林愛生・工藤淳, 『妊娠より健全なる育児法』駸々堂書店  
瀬川昌耆, 1925, 『増補改訂 実験上の育児 病児及虚弱児の養育法』新橋堂  
田中幸一・木村善堯, 1925, 『こどもとは』春陽堂  
大久保亘穆他, 1925, 『育児衛生の手引』事業之日本社  
阿部貞夫, 1925, 『育児集談母のつとめ』日英社出版部  
(昭和 終戦まで)  
原田達三, 1928, 『乳児及び幼児の育て方と其看護法 上巻』博文館  
高田義一郎, 1929, 『結婚読本』春陽堂  
1929, 『赤ちゃんから両親へ』春陽堂  
1936, 『実例育て方の「コッ」=彼女は如何にして育児に失敗したか』人文書院  
育児科学研究会, 1931, 『赤ん坊 正しき理解と正しき育て方』育児科学社  
主婦の友社, 1932, 『安産と育児法』主婦の友社  
倉橋惣三・母子愛育会編, 1935, 『愛育読本』三省堂

(きのした じゅんこ 看護学科)

2021年4月30日受理